

平成 21 年 5 月 15 日現在

研究種目： 基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号： 19520660

研究課題名（和文） 未開社会の土器生産と縄文社会の比較研究

研究課題名（英文） The Ethnoarchaeological Study on Jomon Society by Referring to the Domestic Pottery Production in Papua New Guinea.

研究代表者

高橋 龍三郎（TAKAHASHI, Ryuzaburo）

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：80163301

研究成果の概要：

パプア・ニューギニアのイーストケープ地方で家庭的土器生産に関する民族誌調査を実施し、土器型式が集団内で分有され世代間に継承されるメカニズムと、それが一定の地理的範囲に分布する要因を調査した。縄文土器の型式と分布に直接関わるテーマで、単系出自社会であること、婚姻とトーテムなどの親族構造と係わることを解明した。比較のために千葉県印旛村の戸ノ内貝塚を調査し、姥山 式とその分布の実態を比較した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2008 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：

科研費の分科・細目：

キーワード：家庭的土器生産、女性土器製作者、土器型式、地理的分布、世代間の継承、親族構造、トーテム、母系制社会

## 1. 研究開始当初の背景

縄文土器研究が90年以上の研究史をもちながらも、縄文土器型式に反映する社会の実態は解明されることがない。編年研究が進展し、土器の細別を尽しても、本題目に接近する事はできなかった。それは生きた同等の社会に於いて、土器がどのように生産され、型式がどのように分有・継承されて、親族組織の中でどのように定着し配分・流通され地理的分布を形成するかについて、調査研究がなされてこなかったからである。これについて、今まで日本の先史考古学は実態解明の努力を殆どしてこなかった。縄文土器資料が増えれば、自ずと判明すると考えた楽観的な見方が支配的であったからである。しかし、資料が増加するだけで、縄文社会が解明出来るほど、状況は単純ではない。むしろ、土器型式のどの部分が、社会のどの部分を反映するという法則が全くない以上は、あらためて未開社会の実際のケースに当たって調査することが肝要である。

しかし、そのような手法は、同等の社会において可能な方法論である。家庭的土器生産を実施するメラネシアの未開社会は、その意味で限度ぎりぎりの段階にある。というのも、パプア・ニューギニアは、近年特に開発が進展し、地方の隅々まで貨幣経済が浸透し、伝統的な社会や親族構造に影響を与え始めたからである。したがってそれらの伝統的世界が変容して、旧来の家庭的土器生産が消滅するのも時間の問題だからである。

伝統社会と伝統工芸が本来のコンテキストの中で機能する時代はまもなく終わりを告げるだろう。それらが消滅する前に、本研究を実施しておく必要があった。その意味で喫緊の課題であるといえる。

## 2. 研究の目的

(1) イーストケープ地域の女性土器製作者が、どのように土器装飾や器形、器種を共通認識するかの実態調査。これは型式が成立するために認識論レベルの問題で、製作者個人が互いに共通した認識を共有しているかの調査である。

(2) 型式内容を集団内で分有するメカニズムと世代間で継承されるメカニズムの解明。

土器型式がある特定の親族集団を中心に製作され、同じ物が同時期に他の集団でも製作されるメカニズムを解明することと、異なる世代間で、例えば母から子供へ、さらに孫娘へと継承される技術が、具体的にどのような手続きを経て正確に伝承されているかの調査。土器の製作実験を必要とする。

(3) 親族組織におけるトーテムズムの実態と婚姻関係の把握、および土器型式の流布のあり方との相互関係の把握。親族構造を決定づける婚姻、さらに婚姻を方向付ける外婚制、外婚制を規定するトーテムズムは、集団の表徴であると同時に、土器型式の動きを外側から統制する根本的な要因である。その調査を抜いては、土器型式の成立を解明することはできない。

(4) 土器型式が変化するメカニズムの解明。

女性土器製作者が、母系的に製作技術を誠実に伝承するならば、幾世代を経ても土器型式は変わらないことになる。しかし、縄文土器型式に見る如く、土器の装飾や技術は時と共に確実に変化して行く。その変化をもたらす根本要因が何であるかの解明は避けて通れない課題である。

(5) 縄文土器型式の地理的分布と型式内容の変異に関する予察と民族誌との比較研究。

実際に縄文土器型式の内容を吟味し、型式の内部に上記(1)~(3)に係わる内容があれば、それをどのように抽出できるかについて検討する。その作業により型式の地理的分布範囲の実態がどのようなものから構成されているのかが解明でき、民族誌との比較が可能になる。

## 3. 研究の方法

(1) パプア・ニューギニアの未開社会、イーストケープ地方に滞在しながら、家庭的土器生産を行う女性製作者たちから聞き取り調査を行い、型式の認識の仕方や、文様等の土器製作を誰から学んだか、また誰とどのような具体的内容について情報を交換したかについて聞き取り調査する。それにより技術的系譜関係や継承の様態とクランなどの親族組織との対比を可能にする手掛かりを得ることができる。

(2) 女性土器製作者の親族関係、交友関係を明らかにし、血縁的系譜関係に基づく土器型式のまとまりの状況、また交友関係に基づく型式の横への広がりについて明らかにする。これによって血縁関係を越えた地域社会で同じ土器型式が保有されるメカニズムが明らかになる。

(3) イーストケープ地方の婚姻関係を律するトーテムズムの実態の解明と、婚姻を通じた女性の移動、また家族世帯の移動を通じて土器型式が地理的に流布されるシステムについて解明する。

(4) イーストケープ地方のトバ村で、地方一の土器製作者と高く評価されるD女史から聞き取り調査を行い、土器型式がなぜ変わるのか、誰が変えるのかについて明らかにする。またその型式変化が、どのように地域に波及して行くのかについて、実地で観察することができる。

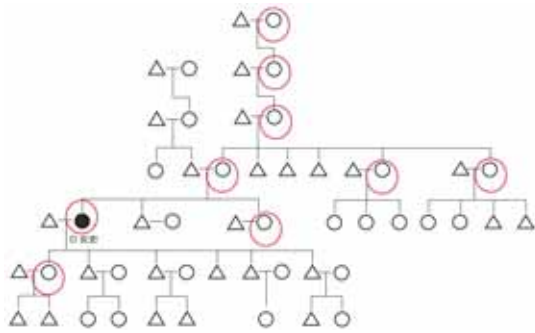
(5) 縄文土器型式のあり方と比較するために、千葉県印旛村所在の戸ノ内貝塚を発掘調査し、姥山 式の型式のあり方、地理的分布について明らかにし、イーストケープ地方における土器型式のあり方と比較する。

そのために夏期に戸ノ内貝塚を発掘して、短期間の居住により残された一括資料を得て分析し、他遺跡との関連を明らかにする。

## 4. 研究成果

### (1) 土器製作者世代間の技術伝承

本来、土器製作技術は、母や祖母など血縁関係にある年長者から教わり、受け継がれていく。母親から習うことが最も一般的で、母が幼いころに亡くなった場合は祖母に習うことが多く、伯母、義母、友人の母などに習うこともある。



## (2) 器種分類

本地域では、浅鉢を基本的な器形に、giluma、habaya、gumasila、pidolaなどの細別器種が存在する。土器製作技術は、器種によって成形方法が多少異なるため、製作者によって作ることのできる器種が限られる場合がある。一般的な器種はgilumaとhabayaであり、gilumaは調理用、habayaはイモやサゴを磨り潰すために用いる器種だという。いずれも径30cm程度の日常用のものと、径40cmを超えるtoleha(葬送儀礼)用のものがある。gilumaは頸部で屈曲して立ち上がるのに対し、habayaは屈曲することなく立ち上がる。gilumaは、屈曲部にdagiloloと呼ばれる貝殻の腹で施した区画線が引かれ、そこから上の垂直に立ちあがる部分に文様が描かれる。gilumaの文様は、下向きの罫いを2~3重に重ね、その中に各種の文様を施すもの、同じく上向きの罫いを重ねるもの、罫いを施さず単位文様の身を描くもの、の大きく3種類があり、例外として文様を2段に重ねて描くものが見られる。habayaは疣状や耳状の突起が付されることが多いが、機能的なものではなく、あくまでhabayaとして見分けのための突起であるという。また、gilumaの口唇は乳頭状に作出されることが多いが、habayaは内削ぎ形に作出される場合が多い。文様は突起を基準とするラインと、口唇部に描かれる。

## (3) 文様の分類

ここでは、giluma、habaya、gumasila、について、調査で取得できたデータをもとに、施文され文様をいくつかのグループに分類し、その分布をみた。

giluma

- A: 下向きの罫い(鋸歯状文等)
- B: 上向きの罫い(鋸歯状文等)
- C: 罫いなし(短い斜線と長い斜線等)
- D: 2段構成

habaya

- A: 疣状の突起(波線等)
- B: 耳状の突起(横位:鋸歯状文+縦位線等)
- C: 耳状の突起(縦位)
- D: 突起なし(蛇行横位線+鋸歯状文等)

gumasila

- A: 鋸歯状文
- B: 鋸歯状文に扇形の文様

C: 鋸歯状文に斜線充填

D: 逆U字

## (4) 文様の分布と親族組織

以上のように分類した文様を、土器製作者別に分析を行った。また、文様の分布や共有の関係を探るため、土器製作者をクランごとに分類した。クランはケヘララ、トパで計12が確認されているが、それらをさらにパードトーテムで括り、5グループに分類した。

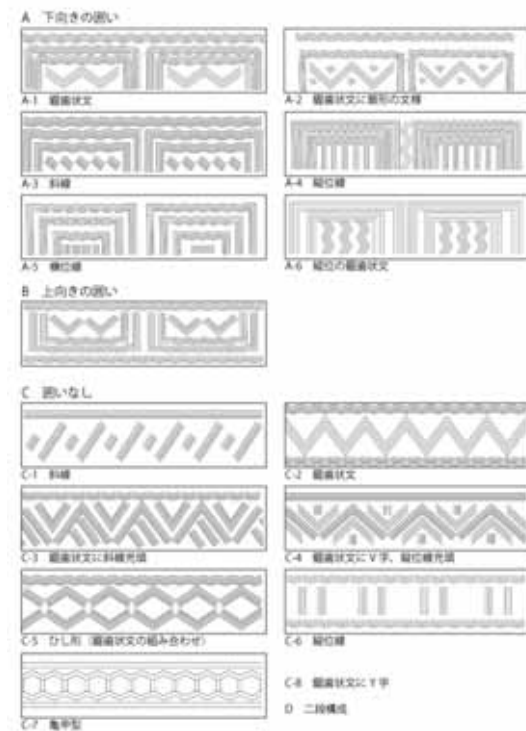
giluma

gilumaの文様は、矩系の罫いを施して、その中に文様を施すものと、矩系の罫いを施さずに文様を描くものがある。調査では、粘土板にインフォーマントが所有する土器文様を描いてもらうという調査も行った。その際、罫いは表現されておらず、罫いの中に描かれる文様を、自身の文様として認識しているようである。

文様の分布をみると、下向きの罫いを施すものはトパで、罫いを施さないものはケヘララに集中する傾向が見られる。また上向きの罫いを施す文様は、ヘゴクランの女性2人しか描いていない。

habaya

habayaの文様は、付される突起から大きく4つに分類した。トパでは突起を付さないものも多くみられる。また、トパの方が口唇部の内削ぎの度合いが



高いようである。

## (5) 個人

名人と称されるD女史は非常に多くの文様を有している。表には我々が調査で実際にデータを取得した土器に描かれた文様のみが反映されている。しか

し、D女史には別に粘土板上に彼女が有する文様を描きだしてもらっている。その結果、D女史は30を超える文様を有することが確認されている。

#### (6) 土器の変化

( 型式変遷の契機 )

技術伝承のメカニズムからは、母親から娘へ、さらに孫娘へと技術が継承されて行く姿を観察することができた。しかしそれでは永遠に土器型式は変化することのない、連続体として描かれることになる。しかし縄文土器型式は年代的に変化して止まない型式変遷を遂げていることから、そのメカニズムを民族誌的に研究する必要がある。そこで、イーストケープにおいて土器型式が変化する契機を検討するために、地域の土器作りに最も大きな影響力をもつ第一人者のD女史から聞き取り調査を行った。そこで判明したのは、自他共に第一人者と認めるD女史から、自分が土器の型式を変えうる第一人者であるとの回答を得たことである。これはD女史がモデルチェンジを行い、それを親族の土器製作者がフォローアップし、やがてそれ以外の土器製作者仲間が模倣することによって引き起される事を示していた。それらは土器製作をリードする文字通りの「達人」がおり、その人のリードが重要な型式変化の引き金になることを物語っている。上記のような状況下で、土器変化が普及する可能性として考えられるのが toleha などで土器製作者が集まって土器製作を行う場合である。toleha では同一クランの成員による協力が不可欠である。特に、集まる多くの人のために、調理用の大型の土器が必要になる。土器製作者が一堂に会することで、製作技術に関する情報交換が行われる。本地域においては、土器の器形は深鉢のみに限られるため、主として交換される情報は文様に関するものであると思われる。そのため、文様は主として同一クランの成員の間でまず普及し共有され定着することが想定される。

もう一つの土器の変化としては、他地域、特にWari島の土器の影響が考えられる。Wari島の土器は、大型で薄手であるため、tolehaにおける調理の際は好んで使用される。Wari島に親戚がいる場合は、tolehaのために土器を注文したり、協力に対するお礼として土器をもらってきたりすることが見られる。また、親戚にWari島の土器を作ることができる人物がいる場合は、イーストケープ伝統の土器とともに、Wari島の土器の製作技術も習っている場合がある。

Wari島の土器はある種のステータスとして役割を果たしていると考えられ、それを真似たと考えられる文様も見られる。Wari島の土器を真似た文様は、多くはtoleha用の大型のgilmaに見られ、特別な文様としての認識も考えられる。

#### (7) 社会と土器

トパミッションには、7つのクランが残っており、それぞれ鳥、蛇、魚、植物のトーテムを有する。クランに相当するタワラ語はguguniであり、特定の場を占有・居住する権利、特定の場で農耕・漁労を

行なう権利など、重層的な意味合いを併せ持つ単語である。ただし現在は、土地の権利のみを意図して使用される場合が多い。クランの内、ヘヘゴ(Hehego)、モデワ(Modewa)は、昨年度調査でケヘララミッションにおいて同名のクランが確認されている。これらはバードトーテムも同一であり、何らかの関係があるものと思われる。また、ガルボイ(Garuboi)については、Seligmannの先行研究の中で、ミルン湾を挟む南側の半島に位置する、ワガワガ(Wagawaga)において確認されている。ガルボイは蛇の名前でもあるため、スネークトーテムは同一であるが、バードトーテム、フィッシュトーテムは別名のもので報告されている。このガルボイクランが由来をいつにするものか、名前が同じだけで異なる由来のものかは追加調査を有する。

また、同じフラナ(Hulana)クランでも、プラントトーテムがPutoのもの、Ohyoのものがある。これらは、トーテムが異なるということから、別のクランであると認識されている。一方、バグマニ村では、同一村内において、ガブブ(Gabubu)クランと、ハナウリ(Hanauli)クランの2つのクランが存在している。特にガブブは、同じクラン内でも居住する区域の違いからタウディ(Taudi)、ヨビラババナ(Yobilababana)、ワヤク(Wayaku)の3つのグループが存在する。ガブブとハナウリはスネークトーテムが異なるため、別のクランであると認識されている。しかし、ガブブ内の3グループは、いずれも同一のトーテムを有しているため、あくまで居住エリアにおける呼称の違いであり、同一クランであるとの認識がなされている。

#### (8) トーテムに関する調査

魚・蛇・植物等、鳥以外のトーテムは、2006年度調査の段階では確認できなかった。クラン内の通婚もかつては禁止されていたそうであるが、現在は可能であるという。しかし、同じクラン内であっても、由来を一にする集落間での通婚は禁止されている。トーテムである鳥への接触や食肉等に関するタブーも調査時は特に確認できなかった。

2007・2008年度調査では、バード、スネーク、フィッシュ、プラントの4種類を確認することができた。ケヘララでは、バードトーテムが重視されている様子が確認でき、先行研究でも当該地域特におけるバードトーテムの重要性を見ることができる。しかし、先述のダワタイ村では、トーテムに関する聞き取りを行った際、真っ先に返答されたのはスネークトーテムであるガルボイであった。ダワタイ村の属するガルボイクランは、バードトーテムも有するが、一般的にトーテムとして認識しているのはガルボイであるという。トパでは、すべてのクランにおいてバードトーテムとスネークトーテムを確認することができた。本地域においては、バードトーテムと並び、スネークトーテムが重要な役割を果たしていたことが想像される。フィッシュトーテムに関しては、モニュメントの存在を確認することができ

た。モニュメントはトパではなく、ケヘララの学校に残されている。一方で、トーテムに関するタブーは、ケヘララと同様、忘れ去られてしまったのか、確認できなかった。

#### (9) 親族組織からみた土器づくり

トパ出身で、ケヘララに婚入した女性は、ケヘララでは土器は作らないと答えていた。ケヘララにも粘土採掘坑はあるが、トパ出身の女性には採掘権がなく、実質的に土器製作の場が制限されている。また、toleha では、同一クランの成員である女性が集まって土器を作ることがあり、文様などの情報を交換したものであると思われる。これらのことから、親族組織やクランによる土地利用の権利、toleha における協力関係が、本地域における文様の地理的分布をもたらし要因の一つとして考えられる。

#### (10) 計測可能属性の統計学的分析

イーストケープで用いられている完形土器のサイズを記録し、それらについて統計学的分析を行った。分析の目的として、当地に外来系土器を搬出しているワリ島の製作技術が、どの程度導入されているかを検討するためである。1970年代後半、ワリ島に近接しているトゥベトゥベ島にて民族誌調査を行った Macintyre (1990) は、同島の製作者集団がワリ島まで製作技術を習いにいき、時に粘土原料を獲得してきたことも記録している。同様の現象が、中間的な性格を持つイーストケープでも起こっていると想定された。すなわち、単に土器が搬入されてくるのではなく、器種名にも表れているように、製作技術自体の模倣が行われているのではないかと考えられるのである。

まず製作法の違いが如実に表れると考えられる、底部・器形・サイズ・文様幅の割合などについて統計分析を行い、在地伝統に忠実に製作する製作者と、模倣技術を保有した集団の違いを動作工程の違いとして抽出した(図)。更にこの違いは、模倣技術導入の程度の違いとしてのみ表れるのではなく、製作者自身が属するクランや、製作者の世代の違いによっても強い影響を受けることが分かった。

#### (11) 戸ノ内貝塚での発掘調査と土器群

2007年(9月1日~9月24日)、2008年(8月30日~9月24日)まで、千葉県印旛村に所在する戸ノ内貝塚の晩期遺構を発掘調査した。竪穴住居と目される遺構から短期間の居住を思わせる土器群(姥山式)を得たので、型式ごとに細別し姥山式を選び出し、器種の分類、器種と装飾文様の対応関係について、共通認識が形成されているかを調査した。器形と文様、文様帯と文様内容、突起装飾などに法則に近い緊密な関連があり、戸ノ内貝塚周辺部では、比較的斉一性が強い土器群が得られた。これらは近隣の遺跡(宮内井戸作、井野長割、曲輪内、荒海)などの諸遺跡の遺物群と比較中である。さらに千葉県東部などとも比較を予定している。小さなクラン単位の現象なのか、それとももっと小規模の親族組織の単位を反映するのか、今後研究を深めたい。ま

た後・晩期のトーテムについて、動物形土製品を媒介に、印旛沼周辺部、千葉県全体を視野に入れた研究を進めている。異なるトーテム集団間の土器型式の類似度について、逆に同じトーテム集団間の型式の異同について、有為なデータが得られるかどうか、今後の検討に委ねたい。

#### (12) まとめ

パプア・ニューギニアにおける未開社会の土器生産システムから、縄文時代の土器生産と型式の成立を探る本研究は、必要な情報をすべて収集し終えたのではなく、したがって縄文土器型式の背景にある社会組織、集団の動向を探る上では若干の弱点をもつものの、土器型式が成立するための諸要因に係わるデータはかなり集まった。親族構造など、製作者間の技術継承関係、クランなどの差異に基づく型式の変化、同世代間の技術の交流状況、土器製作の達人による型式変化の契機、その普及と定着に係わる側面など、多くの点で成果を生み出した。

女性土器製作者達からの聞き取りによると、土器製作を教えたのは彼女らの母親たちであり、その意味で母系制社会における技術伝統が母親から娘、さらに孫娘へと継承されて行く姿が明らかになった(技術的系譜関係)また娘集団が交友関係にある同世代の土器製作者たちとの頻繁な交流を介して、文様や器形など技術的な内容を学んでいる実態が明らかになった(交流関係)集団で纏まって土器を製作する機会が重要な役割をはたしている。このように一地域における土器型式の伝統と地理的分要因の実態を知ることができた。

一方で、聞き取り調査を通じて村々の親族構造についても知ることができた。それを基礎に、土器型式との対比を試みたところ、クランによって区切られた分節集団が保有する土器製作の内容に、集団ごとで若干の違いが浮かび上がっており、クランを基調とした親族関係による差異と考えることができた。これは型式の微細なレベルで、クランごとにまとまる、ある「癖」が存在することを示している。これらは、トーテムに基づいた婚姻関係の結果、および婚姻に根ざした夫婦の移動の結果であると推察した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)  
〔雑誌論文〕(計 11 件)

1. Ryuzaburou Takahashi  
Symbiotic Relations between Paddy-Field Rice Cultivators and Hunter-Gatherer-Fishers in Japanese Prehistory:  
Archaeological Considerations of the Transition from the Jomon Age to the Yayoi Age, in *Senri Ethnological Studies* 73, *Interactions between Hunter-Gatherers*

and Farmers: from Prehistory to Present Vol. 73  
(査読有り) 2009年4月 pp71-97

2. 高橋龍三郎 「パプア・ニューギニアの民族考古学調査」 『南山大学人類学オ-プンリサーチセンター2008年度年次報告書 研究会・シンポジウム資料』(査読無し) 南山大学 2009年3月 pp236-243

3. 高橋龍三郎、井出浩正、根岸洋、中門亮太、根兵皇平 「パプア・ニューギニアにおける民族考古学調査(5)」 『史観』160冊(査読なし) 2009年3月 pp72-89

4. 高橋龍三郎、井出浩正、中門亮太、大網信良、新海達也、根兵皇平、高橋想、斎藤直幸 「千葉県印旛郡印旛村戸ノ内貝塚第4次発掘調査概報」 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』54輯(査読あり) 2009年2月 pp109-135

5. 高橋龍三郎 「書評 縄文土器総覧(小林達雄編)」 『季刊 考古学』106号(査読無し) 2009年1月 pp105-106

6. 高橋龍三郎・谷口康浩・安斎正人 「縄文社会の変化と階層化」 『季刊 東北学』15号(査読無し) 2008年5月 pp6-24

7. Ryuzaburou Takahashi Palaeolithic Culture and Society in Nile River Valley, *Oriental* Vol. XL (査読有り) The Society for Near Eastern Studies in Japan 2008年5月 pp3-22

8. 高橋龍三郎 「総論 縄文時代の社会組織」 『縄文時代の考古学10 人と社会』(査読無し) 同成社2008年4月 pp17-26

9. 高橋龍三郎・菊地有希子・森下壽典・井出浩正・中門亮太・根兵皇平・大網信良・新海達也 「千葉県印旛郡印旛村戸ノ内貝塚第3次発掘調査概報」 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』53輯(査読有り) 2008年3月 pp61-85

10. 高橋龍三郎・細谷葵・井出浩正・根岸洋・中門亮太 「パプア・ニューギニアにおける民族考古学

的調査報告4」 『史観』158冊(査読無し) 2008年3月 pp74-99

11. 高橋龍三郎 「縄文社会理解のための民族誌と理論」 『縄文社会を巡るシンポジウム 縄文社会の変動を読み解く』(査読なし) 縄文社会研究会 2007年10月 pp79-93  
〔学会発表〕(計4件)

1. 高橋龍三郎 「パプア・ニューギニアにおける民族考古学」 公開研究会「パプア・ニューギニアの物質文化」 南山大学 2009年1月

2. 高橋龍三郎 「縄文社会の復元に向けて」日本考古学協会60周年記念講演会『大学考古学と地域社会—縄文研究の最前線—』 2008年10月

3. 高橋龍三郎・井出浩正・中門亮太 「千葉県印旛郡印旛村戸ノ内貝塚発掘調査の概要」日本考古学協会第74回総会 2008年5月

4. 高橋龍三郎 「縄文社会とトーテミズム」 第13回早稲田考古学会 研究発表 2007年12月  
〔図書〕(計3件)

1. 安斎正人・高橋龍三郎 『縄文時代の社会考古学』 共編著 同成社 2007年12月

2. 高橋龍三郎 「総論：考古学と現代社会」 『現代の考古学1 現代社会の考古学』 朝倉書店(岩崎卓也氏と共著) 2007年9月

3. 高橋龍三郎 「関東地方中期の廃屋墓」 『縄文時代の考古学9 死と弔い』 同成社 2007年5月

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

高橋 龍三郎(RYUZABUROU TAKAHASHI)  
早稲田大学・文学学術院・教授  
研究者番号：80163301

### (2) 研究分担者

井出 浩正(HIROMASA IDE)  
早稲田大学・文学学術院・助手  
研究者番号：20434235

### (3) 連携研究者

なし